

所属・資格 英文学科・教授

申請者氏名 吉良 文孝

研究課題		英語知覚動詞構文の研究
報告の概要	研究目的 および 研究概要	本研究では、英語の知覚動詞構文の受動化に伴う振る舞いを扱う。たとえば、(1) I saw him {cross/crossing} the street. を受動態にすると、補文内に原形不定詞 (cross) が用いられる場合と現在分詞 (crossing) が用いられる場合とでは、その受動態が異なる。原形不定詞の場合は、(2) He was seen to cross the street. となり、現在分詞の場合は、(3) He was seen crossing the street. となる。つまり、現在分詞の場合は crossing が保持され、原形不定詞の場合は、cross から to cross のように to 不定詞にしなければならない。これはなぜなのかを意味的に探ることが本研究の眼目であった。この現象を解く具体的なカギは、(a) 受動化と「意志性」、(b) 知覚動詞と補文内動詞の「時間幅」、(c) ing 形と原形不定詞と「瞬間性」の観点からの考察である。
	研究の結果	知覚動詞構文の受動化については、まず、能動文と受動文の「意志性」とのかかわりを考えなければならない。すなわち、視覚動詞 see を例にするなら、能動文の場合の知覚は、「偶然知覚」と「意図的知覚」があるのに対して、受動文（「目撃される」）の場合には、「意図的知覚」はなく、「偶然知覚」（たまたま目撃したの意味）しかない。これは、受動化には「意志性」が入り込めないことの証左である（したがって、同じ視覚動詞でも、意図的知覚を表わす watch は、原則として、受動化を許さない）。また、偶然に目撃される場合は、瞬間的に目撃される場合が多く、その知覚には時間的な幅がない。以上をまとめると、受動化される場合は、①偶然の目撃であり、かつ、②瞬間的な出来事の目撃（「点」として捉えられている）、という意味特徴を持つ。この2番目の特徴が、知覚動詞構文の受動化（原形不定詞か to 不定詞かの選択）に際しての決定的な要因となる。すなわち、能動文の原形不定詞が受動化されると to 不定詞になるのは、「to 不定詞は、出来事を、いわば、カプセルに閉じ込める（つまり、出来事を「点」として捉える）ような機能を持つからである」と結論づけた。加えて、能動文の現在分詞が受動化に伴い現在分詞のまま保持されるのは、「-ing は「瞬間」を表わすことができる（これも、出来事を「点」として捉える）からである」と結論づけた。
	研究の考察・反省	能動文の原形不定詞が受動化に伴ない to 不定詞になる理由について、「to 不定詞は、出来事を、いわば、カプセルに閉じ込めるような機能を持つ（出来事を「点」として捉える）からである」と結論づけた。この分析に誤りはないものと思われる。しかし、2024 年に出版された英和辞書『Olex』（第3版）には興味深い調査結果（英語母語話者へアンケート調査）がある。これによると、非意図的な知覚動詞 (see/hear) に関して、約8割もの英語母語話者が、「受動態にした場合、能動文の原形不定詞は現在分詞 (-ing 形) にする」との回答結果が得られたとしている。この回答結果は、これまでの伝統文法（学校文法）にはないものであり、この点をどう考えるかという新たな「課題」が生じた。
研究発表 学会名 発表テーマ 年月日/場所 研究成果物 テーマ 誌名 巻・号 発行年月日 発行所・者	<p>※この欄は、本報告書提出時点で判明している事項についてご記入ください。</p> <p>本研究については、 第19回モダリティワークショップ（2024年9月5日、6日開催。於 静岡県立中央図書館）において、「知覚動詞構文の受動化をめぐる」と題して発表を行なった。また、適宜修正を加えたその完結版として、第20回モダリティワークショップ（2025年3月22日、23日開催。於 静岡県立中央図書館）において、「知覚動詞構文の受動化をめぐる」（完）と題して発表を行なった。 なお、上記の内容は、開拓社から『不定詞をめぐる』（仮題）と題して今秋に出版される予定である。</p>	